http://www.music-communication.com

神戸女学院大学

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和２年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

2020_報告書本文_cc2019.indd 1 2021/05/13 9:54

2020_報告書本文_cc2019.indd 2 2021/05/13 9:54

音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和２年度　活動報告書

目　次

はじめに …… 2

教員・スタッフ紹介・令和２年度活動概要 …… 3

令和２年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

1．第 1 回　体は喋る …… 4
2．第 2 回　社会的危機の中でのマネジメント～危機の中からチャンスを見出す～ …… 6
3．第 3 回　音楽をひきうける身体（心）言葉～演技メソードの援用～ …… 8
4．第 4 回　カラダを奏でる非言語の身体コミュニケーション～動きと音は双子のきょうだい !? ～ …… 10
5．第 5 回　ビジネスコーチングのアプローチによる音楽家のためのコーチング実践 …… 12
6．第 6 回　即興は怖くない！
～色々な音楽的手法と自由なアイディアでモチーフを膨らませてみよう～ …… 14
7．第 7 回　オリジナルソングをつくろう～メロディーに自由にコードをつける～ …… 16
8．第 8 回　クラシック音楽と社会との関係を考える …… 18
9．第 9 回　参加者の心を動かすインタラクティブなプログラムデザインのコツ …… 22
10．第 10 回　多様な視点が交差する～観察し、やってみて、対話する時間～ …… 24
11．第 11 回　ワークショップ企画案発表及び総括 …… 26

おわりに …… 28

はじめに

東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部とが連携して取り組んできた共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、お蔭様で 12 年目となりました。

今年度は、2020 年春から日本でも顕在化した新型コロナ・ウイルス感染症の影響で、変則的となりました。緊急事態宣言が発令されて大学の授業も遠隔化され、学生たちはキャンパスに集うことができませんでした。そのため、前期に予定されていた講座の大半が後期に後ろ倒しとなり、例年であれば９月に東京と兵庫で実施してきた音楽作りワークショップ特別研修も、海外からの講師招聘が難しく、中止を余儀なくされました。

このような状況ではありましたが、交響楽団や音楽マネジメント、舞踊、身体と音楽のワークショップ、即興演奏等、さまざまな分野で活躍されている講師をお迎えして、座学や実践によるご指導をいただくことができました。時代に先駆けて遠隔での授業に取り組んできた蓄積が生かされた１年でもあったかと思います。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1 年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

2021（令和３）年３月

津上智実（神戸女学院大学音楽学部・教授）

＊開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座Ａ・Ｂ（東京音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

2020_報告書本文_cc2019.indd 2 2021/05/13 9:54

教員・スタッフ（令和３年３月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	赤木 舞		非常勤講師
	磯野 恵美		連携センタースタッフ
	坂本 夏樹		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	荒木 この美		連携ルームスタッフ
	藤山 愛子		連携ルームスタッフ

令和２年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれも Zoom により実施

第１回：令和２年６月 26 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第２回：令和２年７月 17 日（金）	発信校：神戸女学院大学
第３回：令和２年９月 25 日（金）	発信校：東京音楽大学
第４回：令和２年 10 月２日（金）	発信校：東京音楽大学
第５回：令和２年 10 月９日（金）	発信校：神戸女学院大学
第６回：令和２年 11 月６日（金）	発信校：東京音楽大学
第７回：令和２年 11 月 27 日（金）	発信校：東京音楽大学
第８回：令和２年 12 月４日（金）	発信校：神戸女学院大学
第９回：令和３年１月８日（金）	発信校：神戸女学院大学
第 10 回：令和３年１月 15 日（金）	神戸女学院大学のみ実施
第 11 回：令和３年１月 22 日（金）	発信校：東京音楽大学

2020_報告書本文_cc2019.indd 3 2021/05/13 9:54

令和2年度　第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「体は喋る」
講　師	島﨑　徹（振付家、神戸女学院大学音楽学部舞踊専攻教授）
実施日時	2020年6月26日（金）14：10～15：30
実施場所	神戸女学院大学　エミリーブラウン館Bスタジオ（Zoomにて配信）
講座の概要	第1回のミュージック・コミュニケーション講座は、振付家で、本学音楽学部舞踊専攻教授の島﨑徹氏を迎えた。 島﨑氏は、日本での幅広い活躍はもちろんのこと、世界一のバレエコンクールであるローザンヌ国際バレエコンクールにおいて、審査員やコンテンポラリー課題曲の振付けを行うほか、アメリカ、パリ、ベルギーなど世界中の一流カンパニーからのオファーが殺到する振付家である。 「他人より自分を愛していたり、他人より自分が大切であるのなら、イメージを作らずに自分を作れ。イメージでもって本来の自分ではなくそれ以上の自分を見せる風潮、それは僕らのやっている芸術では通用しない。」という印象的な言葉で島﨑氏の講座が始まった。 数を増やすことに価値を見出す現代の資本主義社会において、たくさんピルエットの回転ができる、人よりも高く跳ぶことができるなどで目を満足させる人は沢山いるが、目を満足させるものは芸術ではないと言う。そして、本当に心打つものを見たとき、人は訳もわからないのに涙が出ることがあるが、これが本来の芸術の在り方であるということを私たちは知っておかなければならない、と語った。 振付という仕事はカタチを創るもので、そのカタチが故に世界中のあらゆる環境で育った人に共通の想いを感じさせるものがある。誰かから教えられたわけでもないが、同じように感じることこそが真実であり、これはどの芸術においても共通であると言う。 あなたがどういう人間かというのは、踊りや音楽に表れるため、音楽だけをそこに持っていくのではなく、人としてそこに行くしかないのだとし、芸術を高めることとは、人間度を高めることであり、あるいは人間度を高めることで芸術を高めることができるということを強く語り掛けた。 質疑応答で、学生からの「他人の目が気になってしまう」というのに対して島﨑氏は、もうひとりの自分という他人、自分という観客を作り、自分のファンになるような自分をつくって、そういう振る舞いをする、それになりきることで次第に他人の目が気にならなくなる。自分のことをリスペクトできていれば、他人の目が気になったとしても、ぶれることなく突っぱねることができると答えた。 さらに、他人からの言葉で苦しむことや傷つくことはあるが、傷つくことを心に与えることで、心の皮は厚くなる。ただ、心の皮を厚くしすぎて人の痛みがわからなくなる人間になってはいけない。皮の表面だけは、赤ん坊のように繊細でなければならない。そうであることを芸術家は目指さなければならない、と締めくくった。 今回の講座はコロナウイルスの影響により、通常の対面式の講座と異なるZoom配信によるものであったが、島﨑氏の熱い語りかけは、画面越しの学生らの興味を強く惹きつけている様子であった。

2020_報告書本文_cc2019.indd　4　　2021/05/13　9:54

〈学生のことば〉

・私は今までバレエを見たこともなく、知識も全く持っておらず、自らが励んでいる音楽とは別の世界だと無意識に認識していました。ですが、今回お話を聞かせていただき、本質は同じで踊りや音楽において大切なことの共通点に気づかされました。まず、私自身もワルツなどの拍子感が鈍く、日本人の演奏だとよく言われて苦戦しているのですが、それは日本の風土に合わせた古来よりある耕作が影響し生まれ持って染みついていたものだと聞き、とても納得しました。そのことを理由にせず、音楽に合わせて自分自身の動きや感覚を変えることができるように頑張ります。また、人の目を気にしていつの間にか評判や得点を気にするようにだけはならないよう、自分自身に恥じることがない、人間力の高い人物になる、という言葉を忘れないように日々精進していきたいと思います。また、私は少し悲観的な部分があったので、どうにもならないことを理由にするのではなく、どうにかできることを見つけて実行することが何よりも大切だという言葉がとても胸に刺さりました。幅広い芸術を知り、世界を学び、大好きな音楽に全力を捧げられることに感謝しながらこれからも頑張ろうと改めて心に誓いました。

（神戸 / ピアノ / 1 年）

・舞踊を専門的に学んだことも、知識もなかったので、理解できるかという心配があったものの、そんなことは全く関係なかった。学校に行けず、あらゆることが満足にできず、人の目にさらされる機会も減った、この状況下こそが自分で自分を考えられる、見るチャンスであるといった話が響いた。今のわたしにとって、とても聞きたかった話で、葛藤していることは大事なことだと思えた。

（神戸 / 声楽 / 2 年）

・今回の講座で、特に印象に残ったお話は人は皆上手なダンスを踊りたがっているというお話です。私はダンスは得意じゃないし、今まであまりやったことがなくてそんな風に考えたこともなかったけどなるほどと思いました 寿司職人の寿司を握る動き、ラーメン職人の湯切りの動きさえもダンスに見立てるのはすごいなと思いました。また、人間力を高めることがいい音楽を作ることに繋がっているというのも印象的でした。その人の音楽を聴けば人間性がわかるのでいい音楽には人間力が必要だということがよくわかりました。私も人間力を高められるように日々努力したいです。

（神戸 / ユーフォニウム / 1 年）

・今回の授業では、音楽をやっていく上、生きていく上で、様々な観点から沢山のことを学ぶことができました。先生が発する一つ一つの言葉が名言みたいで、聞き逃さないようにと必死でした。特に何かに取り組んでいる際に壁にぶつかった時、なんで自分だけが・・・と思わずに、みんな同じ思いをしてきたのかと考えるといいと仰っていたのが印象的でした。私は元々そんなにネガティブではありませんが、こういう考え方は持っていなかったので、素敵だな、参考にしようと思いました。

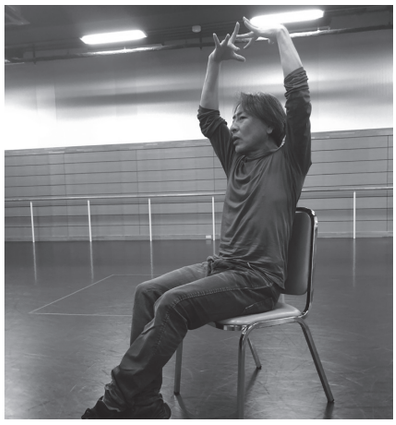
（東京 / ピアノ / 2 年）

・「自分の中に客観的なもう 1 人の自分を作り、ファンになってもらえるように頑張る」という部分が印象的でした。たとえ人と比べられることでも、闘うべきは自分自身であって、他人の目を気にするのではなく自我を強く保ち努力する、というお話がとてもためになりました。また、間違っている方法で努力を続ける方が狭き門であり、自分にできることや、やるべきとわかっていることをひたすらやるということで、この自粛期間もっと頑張ろうと思いました。

（東京 / ピアノ / 3 年）

・身体を動かすことと、音楽を奏でることが、いかに密接な関係であるかが良くわかりました。また、「理想の音楽を奏でられる人になれるかもしれない」「感情をぶつけてやってよいということに感謝すべき」という先生のお言葉が印象的でした。身体と音楽との強い繋がりと発想の転換をこれからの学びに活かしていきたいです。

（東京 / MLA / 1 年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 5 2021/05/13 9:54

令和2年度　第２回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第２回ミュージック・コミュニケーション講座 「社会的危機の中でのマネジメント～危機の中からチャンスを見出す～」
講　師	西濱 秀樹（山形交響楽団協会専務理事兼事務局長）
実施日時	2020 年 7 月 17 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoom にて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第２回の講座は、山形交響楽団協会専務理事兼事務局長の西濱秀樹氏を講師に迎えた。西濱氏は関西学院大学社会学部を卒業し、1995 年、楽団存続を訴えるシンポジウムでの発言をきっかけに関西フィルハーモニー管弦楽団に入社。2003 年から 2011 年まで理事・事務局長を務め、楽団の法人化と黒字化を達成した。支援体制の構築、世界的音楽家オーギュスタン・デュメイの招聘など、同楽団発展の基礎を作った後、2011 年８月から教育事業に携わった。2015 年５月に山形交響楽団協会専務理事兼事務局長に就任し、2018 年６月より日本オーケストラ連盟専務理事を兼務、また 2019 年に台北と北京で開催されたオーケストラフォーラムにゲストとして招待を受けるという経歴を持つ。 昨年度に引き続き２度目の登壇となる今回は「社会的危機の中でのマネジメント ～ 危機の中からチャンスを見出す ～」と題し、現在、全世界で猛威を振るう「新型コロナウィルス感染症」の影響によるオーケストラの現状、また氏が運営に携わっている山形交響楽団の取り組みと、音楽界の今後の課題について話された。 まず西濱氏は、私達国民がマスメディアの報道に惑わされずにコロナウィルスへの対応をしなければならないことを強く訴えた。マスメディアがセンセーショナルで正確性を欠いた報道を行うことで、人々の中であらゆる憶測を生み出し、混乱を招いてしまっていることへの懸念を示した。音楽界におけるコロナ禍の影響はあまりにも大きく、山形交響楽団はフルオーケストラ公演とアンサンブル公演を行っているが、多くの公演の中止が決まり、それらの損失額は約１億２千万円にのぼるという。３月はライブ配信を行ったが、４月には感染拡大を恐れ、奏者らが会場に集まることすら不可能となった。文化芸術を不要不急とする声も広がる中、奏者たちは存在そのものを否定された気持ちになり、活動を控えようとする向きも出てきたが、西濱氏はレベルの高い固定メンバーによる常設のオーケストラならではの「安定感」を強みと考え、「継続的」な活動を行うことが必要だとした。楽団員の雇用を守ることも重要な課題だった。 そこで力を入れたのがライブ配信である。山形県は少子高齢化の現実に直面している中で、新しい活路を見出すために、昨年、他のオーケストラに先駆けてライブ配信事業を始めたところだった。３月、定期演奏会を無観客公演とし、クラシック専門のネット配信サービスで無料配信したところ、リアルタイムで３万人超が視聴した。海外からの視聴者も多く、地方からも世界に挑戦することができるという、ネットの可能性を感じたという。 山形交響楽団は地域との結びつきが強く、長年、各学校への訪問演奏活動（スクールコンサート）を行っているが、その活動も、今年度予定していた 75 公演のうち 40 公演の中止が決まった。「山響」は山形における子どもから大人までの共通言語であるが、この状況では子どもたちが音楽に触れる機会が減ってしまう。戦争や震災では、こんな時だからこそ音楽を届けようと演奏活動を行うことができた

2020_報告書本文_cc2019.indd 6　2021/05/13 9:54

講座の概要	が、コロナウィルスの場合はそれが不可能であり、今までとは全く異なった困難を強いられていると語る。「日本のあらゆる問題点をあぶり出した」コロナウィルスへこれからも向き合っていくために、西濱氏は、現在も支え期待してくれる山形県の人々に応えようと、都市の魅力をオーケストラからも発信する活動を続けていくつもりであると述べた。 質疑応答で、学生から「経営での各種の選択をする際に心がけていること」について問われ、西濱氏は、「期待するだけではなく、最悪の事態を考えること」とし、それは経営の上では大切なことであり、気が小さい性格の方が色々と考えられるため、むしろ経営に向いているのではないかと答えた。また、スクールコンサートの今後についての質問に対し、ライブ配信や演奏の DVD を配布するなど、少しでも活動ができるよう検討していると語った。穏やかな口調ながら、日本の音楽界の今後の発展に対する、熱く積極的な姿勢が印象的で、前回に引き続き Zoom 配信ではあったものの、画面を通して熱意が伝わっていたように思う。

〈学生のことば〉

・やっとコンサートを再開することができても、収容人数は半分になってしまうという事で、利益が生まれず赤字になっていることを初めて知り、驚きました。それでもこの状況下で落ち込んでしまっている方たちの為にパフォーマンスをしている方たちは、本当に音楽の力を信じて、愛しているのだと感じました。クラシックコンサートは裕福な少数派の人たちの娯楽だ、今はしている場合ではない、などと考えている人たちにどうにかして伝えたいと思いました。日本ではあまり取り組まれていない、オンラインでの配信にも取り組み、実際に大きな反響を得ていると聞き、アイディアと実行力は音楽であれ、他のことであれ、とても大切なのだと改めて実感しました。
（神戸 / ピアノ / 1 年）

・地域に根ざす楽団の在り方や具体的な地域との関わりの中で、楽団だけでなく地域にも恩恵を還元する体制に興味と関心を持ちました。これまでの災害や戦争と異なり、集まって演奏することが難しいというオーケストラの根本を揺るがす事態の中でも、「音楽を止めない」姿勢に圧倒され、感激しました。（東京 / ピアノ / 4 年）

・西濱先生の、行動力のエネルギーと意志の強さが感じられました。新しいことに突き進んで向かう姿勢の大切さを学びました。
（東京 / ピアノ / 3 年）

・今音楽業界が置かれている状況を把握した上で、できることは何なのか考えることが必要だと感じました。お話の中で震災や戦争時には音楽を通してみんなの心に寄り添ったり火を灯したりすることができることが分かりましたが、今回の状況では音楽を使って直接与えることはできない代わりに活動し続けることで与える力があるということが分かりました。（東京 / ピアノ / 3 年）

・コロナの影響であちこち公演がなくなっていることは知っていたし、自分の公演もなくなっていた中で、オケを経営するにあたって金銭的な面を含めて考えていくべきこと、また今までの戦争や震災の時の活動例について詳しく知ることができました。公演があまりできない今だからこそ、配信などの新しい形にチャレンジして世界と関わり続けるのも重要だと思いました。
（東京 / 管楽器 / 3 年）

・メディアが世の中を動かしていることに、恐ろしさを覚えました。そして 14 億円もの収入が全国のオーケストラから失われたことを、初めて知りました。たくさんの公演がなくなったことにより、子どもたちが音楽と触れ合う機会がなくなってしまうのは、非常に悲しいです。6 割の方がチケットの払い戻しを請求しなかったことに、温かみを感じました。（東京 / ピアノ / 2 年）

2020_報告書本文_cc2019.indd 7 2021/05/13 9:54

令和2年度　第３回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第３回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽をひきうける身体（心）言葉～演技メソードの援用」
講　師	久恒秀典（東京音楽大学講師）
実施日時	2020 年 9 月 25 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学中目黒キャンパス　C400（Zoom にて配信）
講座の概要	久恒秀典氏は、数々の劇場でオペラの演出家として活動する傍ら、日本の主要な音楽系大学で教鞭を執り、本学でもオペラ実習の指導を担当されている。演出家の立場から、音楽を通した表現者としての立ち居振る舞いや発話について、実演を交えながらお話いただいた。新型コロナウイルスの影響により、東京音楽大学の履修生にとっては今回が初めての対面授業となった。 授業の初めに「音楽をする人は、演者である」という提言があり、演奏家の場合、それぞれの楽器に演奏するフォームがあり、理にかなった身体の使い方ができていれば、自然に美しい姿で演奏ができるというお話があった。演奏中は美しい姿であるが、演奏に至るまでの舞台袖からステージに出るまでの立ち居振る舞いやトークなど、あらゆる場面で人に見せる瞬間があり、ステージに立つ全ての時間がパフォーマンスである。まずは人間の基本動作である立つ、歩く、座るをニュートラルに行う「0 の立ち方」を実践し、芯の通ったパフォーマンスをするために体幹を鍛える重要性を学んだ。 次に、事前に朗読の課題として谷川俊太郎の「生きる」という詩を取り上げ、発話について学んだ。まず、特に指示を受けずに学生が一度朗読した後に、言葉の意図を含めて 2 回目を読んでみるという提案があった。「生きていること、今生きていること、それはミニスカート、プラネタリウム・・・」今は一体いつなのか、生きているということはどういった状態なのか、具体的な名詞には色をつけてみるなど、ディティールを明確にすることでより伝わりやすい表現ができるようになった。自分なりのエッセンスを含めることで、より正しく、わかりやすく、印象的な語りができるということを学んだ。 最後の課題として、心に残っている感動体験を話す課題が与えられた。ある学生のエピソードから単語や感情を取り上げてテーマとし、その意図を伝えるためにどのようなアプローチができるか練習した。テーマは「絆」という単語になり、2 回目の朗読では話し手の表現の繊細さに加えて聞き手の変化をキャッチすることにも注意を払った。意図を明確に伝える方法論として、間を使う、アクセントをつける、強弱や濃淡を使うなどさまざまなアプローチが強調された。 これから多様な表現の場に出会う学生にとって、演出家の視点からのお話を伺う貴重な機会となった。今回は、Zoom と対面を組み合わせたハイブリッド方式の授業で、マスクをした発話の音声を的確に拾い、Zoom 上の参加者を巻き込むためのカメラワークを工夫するなど、テクニカルな対応に苦心する面があった。

〈学生のことば〉

・一番印象に残った事は舞台に出るときの歩き方です。私はピアノの指導をして下さる先生に、舞台に上がる時自信なさそうに歩くよね！と言われたことがあり、頭の奥で気にしていたので、とても参考になりました。上半身を前にして自ら進むように歩くのではなく、後ろから押されて歩き出してしまったかのように歩くとおっしゃっていて、

2020_報告書本文_cc2019.indd 8　2021/05/13 9:54

その姿はとても余裕があるように見えました。今回の授業は実際にその場で先生とお話ししながら実演することができたので、やはり Zoom 授業より学べることが多かったです。

（東京 / ピアノ / ２年）

・講座を受けて、まず自分が普段いかに座り方、立ち方、歩き方といった立ち居振る舞いに意識が向いていなかったかがわかった。ホール練習などでよく「舞台に出てくるところから気迫が足りない」という指導をされていたので、これからは舞台に上がった瞬間から立ち方、歩き方などを意識したいと思った。また、詩の朗読をした際に、単語の一つ一つに色をつけていくのが印象的だった。その作業をする前とする後では明確に聞こえ方が違うことに驚いたし、事前に「この言葉は〇〇色」というふうに聞いていたことが大きいとは思うが、本当にそのようなイメージが共有できていた気がして、感動した。　（東京 / ピアノ / １年）

・詩からそれぞれのフレーズの色を決め、それをイメージした上で読み、大切な言葉を意識して言うことで、聞き手がその世界観に入りやすくなるということを学びました。 私たちの音楽の世界でも、フレーズに色を持たせることや大切な音を意識することでより伝わりやすくなると思ったので、それらを演奏に活かして作曲家の抱いた思いの温度や湿度をお届けできるよう精進していきたいと感じました。　（東京 / ピアノ / ２年）

・とにかく体幹を鍛えようと思いました。良い演奏は良い姿勢、動きの意識からくるという事は本当にその通りだと改めて思いました。言葉で伝える事の可能性を知ることができました。声の色だけでも全く違う印象を人に与えることが出来るのだと驚きました。嘘をつく練習、人の話を聞く練習、嘘を見破る練習など、今まで芸術の幅を広げる為にしたことがなく、ましてや思いつくこともなかったのでとても衝撃を受けましたが、芸術には嘘があっても良い、その嘘を真実のように表現することが芸術だと聞き、とても納得しました。新たな考えを得ることができたのでこれから生かしていこうと思います。

（神戸 / ピアノ / １年）

・緊張した人の体の動きや、表現力を高める動きについて知ることができてよかったです。歩き方や話し方、気持ちを込めるとかなり変わるんだなと思いました。　（神戸 / ユーフォニアム / １年）

・表現することへのアプローチの仕方が豊富なことを感じました。また、細かな動作で伝わるものが違うことに気づきました。谷川俊太郎さんの「生きる」をわたしも朗読させていただき、本当の表現、色付けをすることを実感できました。また東京音大の学生の方々の表現も聞かせていただくことができたのが新鮮でした。（神戸 / 声楽 / ２年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 9　2021/05/13 9:54

令和2年度　第４回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第４回ミュージック・コミュニケーション講座 「カラダを奏でる非言語の身体コミュニケーション～動きと音は双子のきょうだい？！」
講　師	新井 英夫（体奏家・ダンス アーティスト）
実施日時	2020 年 10 月 2 日（金）14：10 ～ 15：40
実施場所	Zoom にて配信
講座の概要	第２回目の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、両大学の学生・教員が各自 Zoom で参加する形式で実施した。講師には Zoom でのワークショップ・授業のご経験が豊富な新井英夫氏をお招きし、遠隔でありながらも Zoom の特性とメリットを活かした実践型ワークショップを行った。新井氏は、国内外でコンテンポラリーダンサーとして活躍すると同時に、日本各地の教育・福祉・社会包摂に関わる様々な現場で「からだを奏でるワークショップ～ほぐす・つながる・つくる～」を実施している。 はじめに、参加者が Zoom の画面をオンにし、曲の緩急を変えながらラジオ体操を行った。身体がほぐれたところで、続いては２人ずつのペアを組み、画面を通じてミラーリングというコミュニケーション・ゲームを体験した。Zoom でやることの面白さとして、画面に近づいたり離れたりすることができたり、画面の半分だけ顔を出す、指の小さな動きでも表現ができるなど、画面というフレームを活かした特徴が挙げられた。一方、多少の時差が生じることを踏まえて注意深くコミュニケーションを取る必要性が指摘された。 次に、「動きの森」と題して、Zoom の画面をギャラリービューに設定し、各自が森の動物となり、誰かの動きを真似したり、自分の動きを真似してもらうという活動をした。誰に指示されることもなく自由に表現ができ、画面上であっても誰かと繋がっているという意識を感じ、森としての一体感が生まれた瞬間であった。 一連の身体を使った動きのワークショップに続いては、各自が画面オフおよび音声ミュートをした上で、「4分33秒」の間に聞こえた音を紙に描くというアクティビティを行った。一定の時間、音のみに集中し、普段聞き流している冷蔵庫の音や、風の音などを線や図形で表現することは、学生にとって新鮮で楽しい体験であったようだ。その後、Zoom のブレイクアウトルーム機能を使って、グループに分かれて自分が描いたものをプレゼンテーションし、さらに描いた線や図形を身体で表現してみることを試みた。音を紙の上で表現したり、身体を使って表現したりすることにより、音を目に見える形で伝えながらコミュニケーションをとる手法を体験できた。 最後の質疑応答の中で新井氏は、コミュニケーションでは、意味のあることを伝えたり、論理的に何かを伝える力があるということに偏りがちだが、音楽やダンスでは意味を伝えることだけにとどまらず、そこにある質感や肌触り、音触りといったことも伝えることが重要であると語った。 今回は、身体を使って即興的にさまざまな音を表現する体験ができただけでなく、オンラインによるさまざまな制約を認識しながら利点を最大限に活用する、新たなワークショップのあり方を学ぶ機会となった。

2020_報告書本文_cc2019.indd　10　　2021/05/13　9:54

〈学生のことば〉

・普段はあまり自分の周りの生活音や自然の音を注意して聴くことはなかったのですが、４分33秒間耳をすませてみると、思ったよりもいろいろな音に囲まれながら日々過ごしていることに気づき、驚きました。また、今は物理的にも心理的にも人と人との距離がある世の中になってしまいましたが、今回Zoomを通してワークをすることでいろいろな方とコミュニケーションをとることができて楽しかったです。（東京／ピアノ／３年）

・このコロナ禍だからこその授業内容で、とても勉強になりました。見ている人、ワークショップに参加する人にとって楽しく、また分かりやすく教えるということは難しいですが、とても大切なことだと改めて思いました。　（東京／声楽／２年）

・身体でリズムを表現して、音を絵にするということを日常ではなかなか体験できないので、今日の授業で体験できてとてもいい経験でした。Zoomで音を伝え合うということはとても難しいと思いますが、このようなご時世だからこそできるものもあるのだなと感じました。あまり「音とは」と疑問に考えていなかったので、これからはもっと考えたり感じたりしていきたいと思います。とても楽しく、学べる授業でした。ありがとうございました。　（東京／ピアノ／１年）

・私たちはいつも音楽で「表現」していますが、今日の講義で身体や絵で動きや音を表現することで、普段意識していなかった部分が見えて勉強になりました。なぜその動きをするのか、人それぞれ違うこと、その様子を見ることができて面白かったです。 表現の幅はとても広いので、他にどのような工夫・アレンジができるか知りたくなりました。Zoom という画面上で難しい部分もありますが、離れた場所でも繋がって、伝えて受け取ることができて、今回やったワークは表現について考えるきっかけともなりました。四角の枠の中で全身を映すことは難しかったですが、見える部分でどう表現するか、パターンを色々考えていくのがとても楽しかったです。
（東京／ピアノ／３年）

・体を動かしたり、スケッチをしたりなど、実際に参加する形なのが面白かったです。最初は戸惑ったりもしたけど慣れてくると楽しかったです。音をスケッチするところは普段全く意識してなかった音がいっぱい鮮明に聞こえてきて驚きました。
（神戸／ユーフォニアム／１年）

・ラジオ体操から始まったときは、一体どのような授業になるのだろうと不思議に思いましたが、音楽は心と体が繋がって初めて生まれるものなのだと、最終的に忘れかけていた大切なことを思い出すことができました。今まで体験したことのない人とのかかわり方をして本当に楽しかったですし、また体での表現や音の具現化には様々な可能性があることを再認識させられました。
（神戸／ピアノ／１年）

・「体奏」を初めて自分の身体で持って知ることができて、実践できる学びだったと思います。Zoomでもこんなにできることが沢山あったのも驚きで刺激的でした。初めて交流した人とも、身体表現だけのコミュニケーションができ、むしろ言葉より素直な、自然な感情伝達方法でもあると思えました。　（神戸／声楽／２年）

※写真はZoom配信による講座の様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd　11　　2021/05/13　9:54

令和2年度　第５回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第５回ミュージック・コミュニケーション講座 「ビジネスコーチングのアプローチによる音楽家のためのコーチング実践」
講　師	的場 誠治（ウインドカンパニー株式会社代表取締役、神戸女学院大学非常勤講師）
実施日時	2020 年 10 月 9 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学　合奏室（Zoom にて配信）
講座の概要	第５回のミュージック・コミュニケーション講座は、ウインドカンパニー株式会社代表取締役で本学講師の的場誠治氏を講師に迎えた。的場氏はコーチング技術を用いて、主に青少年らの吹奏楽指揮・指導で活躍している。 コーチングとは、人間の無限の可能性を信じ、人を望ましい場所に運んでいくことであるという。世界的テニスコーチであるティモシー･ガルウェイの著書、『インナー・ゲーム』では、「コーチングとは、コミュニケーションを通じて、相手が自分の望む方向に主体的に進むことを支援する技術」「自分の可能性に気づくことを支援すること」と記されていると説明したのち、的場氏は、叱咤激励では現代の人は傷つくため、心を育てて、無限の可能性を引き出すことが指導者の仕事ではないかと述べた。 また、コーチングとティーチングのバランスを程よく使うべきとし、その上で優れたコーチとは､この人に教えてもらいたいと思われること､観察（calibration）の達人であること、人間の無限の可能性を信じていること、つまりは日ごろから自分の在り方を磨いていくことに興味がある人であるという。 コーチングを学んだ的場氏自身の変化については以下のように語った。 学ぶ前 1. 起きている問題よりも、生徒の人間性に焦点を当てていた。 2. 生徒に対して注意や指示が多かった。 3. 練習させていた。 学んだ後 1. 生徒のなぜできないのかという内的な問題などに寄り添えるようになり、起きている問題の解決にコミットするようになった。 2. 生徒が自信を持って取り組めるようなフィードバックに変わった。できる面を褒める。 3. 自分の可能性に対する発見、責任、コミットメントを導き、心に火を灯す指導を追求。 続いて、人の成長の４段階について①無意識的不能「わからない、できない」、②意識的不能「理解できるが、できない」、③意識的有能「理解できる、意識をすればできる」、④無意識的有能「何も考えず、当たり前にできる」、この４段階の流れを適切に指導できることが、プロの優秀なコーチであると述べた。また、成長の４段階の流れを指導する中で重要なのが、キャリブレーション（相手の心理状態を言葉と振る舞いで認識すること）であり、これは非言語要素（相手の表情、目線、態度、足、姿勢、頷き方などを見る）と言語要素（相手の話し方、声の状態、使っている言葉などに耳を傾ける）から相手の雰囲気を感じること、つまり、見て、

2020_報告書本文_cc2019.indd　12　　2021/05/13　9:54

講座の概要	聴いて、感じながら五感を研ぎ澄まして観察することであると説明した。 　コミュニケーションの大前提は信頼関係を築くことであり、これを専門用語でラポール形成と呼ぶ。ラポールを築くことに努力をすると、安心感、親近感、好感を与え、相手との信頼関係を築きやすくなるという。具体的には、ペーシング（相手のペースに合わせる、共感する）、ミラーリング（相手の動きを鏡のように真似る）、バックトラックペーシング（相手の発言した言葉を繰り返して、オウム返しのように繰り返す）などのテクニックを用いるそうだ。実際の講座では、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用い、10分間、３人１組でこれらのテクニックを用いた会話を行った。 　最後に、人間の脳はイメージと現実、過去・現在・未来の区別ができないと述べ、この特性をフューチャーペーシング（五感を活用する）によって活用し、演奏の本番にどう向き合うかを語った。 　的場氏自身、本番で見事に演奏しているところを何度も繰り返しイメージし、これを脳の予習にするという。すると、本番の時にはリハーサル（予習）が終わっているのでその通りにできるというものだ。演奏中にも、次のフレーズや音に対しても同様のイメージを行うことはとても効果的であると言い、是非実践してみて欲しいと学生たちに語った。

〈学生のことば〉

・信頼関係を築くための技をたくさん学ぶことが出来て良かったです。知らないものばかりですが、確かに話し上手、聞き上手な人たちを思い浮かべると、教えていただいた技術を無意識のうちかはわかりませんが使用しているなと思いました。大学に登校する機会が増え、新たな出会いなどがたくさんある今、是非参考にして使用していきたいと思いました。また、将来人に音楽を教える仕事につきたいと考えているので、生徒の心情に寄り添うことの大切さをよく学ぶことができて良かったです。とても勉強になりました。

（神戸 / ピアノ / １年）

・コーチングについて、こんなにも多様で良い方法があることを初めて知りました。自分の可能性に気づくことを支援、主体的に進むことを支援するなど、起きている問題そのものを解決しようとするのではなく、内面的に生徒と向き合うことが大切であると大変勉強になりました。指導者の言葉ひとつでラポールが一瞬にして崩れることもあるというのも、衝撃的でしたが、納得でした。

（神戸 / 声楽 / ２年）

・今回の講義は、私たち音楽家が今後「一人一人に寄り添う指導者になるために」というお話でしたが、指導者になる前に、音楽を学んでいる自分自身に対しても当てはめられることが多く、指導としてではなく、今の自分にも生かしていきたいことが多くありとても勉強になりました。

（東京 / 声楽 / ３年）

・的場先生の話を聞いて、自分が指導をする側でもされる側でもそのような指導だと良いなと思いました。「生徒の可能性を指導者が潰してはいけない」とよく言われますが、今日の授業ではその指導をする方法をわかりやすく説明して頂けたので、とても楽しく受講することができました。

（東京 / ピアノ / ３年）

・日頃の生活でも、共感力を発揮する場面はたくさんあると思います。また、それはすぐに養えるものではありません。一番近い将来、教える機会があるのは教育実習ですが、まずはそれに向けて、共感力や相手に安心感を与える能力を育みたいと思います。私は、五感を活用した「フューチャーペーシング」をあまりしてこなかったように思います。これからはそれを活用し、本番の時の自分を想像することで良い演奏ができればと思います。

（東京 / ピアノ / ２年）

2020_報告書本文_cc2019.indd 13　2021/05/13 9:54

令和2年度　第６回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第６回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興は怖くない！ ～色々な音楽的手法と自由なアイディアでモチーフを膨らませてみよう～」
講　師	渚 智佳（ピアニスト）
実施日時	2020 年 11 月 6 日（金）14：10 ～ 15：40
実施場所	東京音楽大学中目黒キャンパス　C400（Zoom にて配信）
講座の概要	渚智佳氏は、幼少時よりヤマハ・ジュニアコンサートで作曲にも積極的に取り組まれ、ピアノの演奏のみならず作曲や編曲の分野でも活躍されている。音大生が創作のワークショップを行う際に、旋律を即興的に生み出したり、和声付けをしたりする事に戸惑いを感ずる機会が少なくないため、昨年に引き続き即興の秘訣についての体験を交えた講座を東京音楽大学から発信した。 まず即興の初歩段階として、提示された短いモチーフを反復することから始め、さらにそのモチーフを模倣、発展し繋げていくことで長い旋律を創り上げる手順が紹介された。繋げていく際のコツとして、和音を意識しながらモチーフを展開していくことを挙げられた。これは音大生が日頃学んでいるクラシック音楽にも見られることに言及し、ベートーヴェンを例に挙げて説明された。ベートーヴェンの作品には、分散和音、スケールやアルペジオを多用してでき上がっている曲が多い。既存の曲を分析してみることは、即興の引き出しを豊かにすることにも繋がる。 次に和声付けについて説明された。旋律に対してどのような和音進行でハーモニーをつけるかは悩むところであるが、どんな和音でも可能性があるとのこと。「ソ・ミ・ド」の三音をテーマに即興した旋律に、様々なパターンの和音をつけて実演された。テンションコードや減七の和音の解釈を深めることで「ソ・ミ・ド」という単純な並びのモチーフであっても、発展が可能であると語った。 実際に即興の実習として、グループに分かれて即興を体験し、学生たちが選んだ「レ・♭シ・♯ファ」の音をテーマにした即興演奏を聴きあった。同じテーマであってもリズムの付け方や楽器の特性によってテイストが変わることを体感した。また Zoom で参加した学生も即興に加わり、オンライン上での即興にも挑戦した。最後に「♯ファ・レ・シ・♯ソ・ラ」をテーマにした即興を全員で行い、不協和音の響きを味わった。 作曲というと和声進行に縛られ苦戦することも多いが、即興は自由に音の重なりを楽しむものである。渚氏は、楽譜がある曲を練習するだけでなく、日頃から遊び感覚で好きな音を自由に弾いてみる時間をつくることで、即興に対する抵抗が少なくなるだけでなく、音楽の表現の幅も広がるのではないかと講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・やはり最初は「即興演奏」ということに対して「難しい」や「ピアノ弾けないし…」という思いでしたが、音楽の構成は「和音がほとんど」というお話から少しずつ興味を持てるようになりました。クラシックの名曲を用いて説明してくださり、とてもわかりやすかったです。またテーマの音を基に即興する演奏では、同じ音を使っていても、楽器やリズム、拍子が違うと異なる音楽が創作されていて面白いなと思いました。個人的には「テー

2020_報告書本文_cc2019.indd　14　　2021/05/13　9:54

マの音からの展開」が難しかったです。
（東京 / 声楽 / ３年）

・即興は常に憧れであって、ハードルが高く挑戦したくてもできないと思い込んでしまっていました。今回先生が「即興には間違いはないからまずは弾いてみること」と仰っていたので少しずつでも挑戦してみたいなと思いました。今回はピアノではない楽器を使用してみんなで作りあげながら即興を行ったのでなんとか出来ましたが、１人でピアノを弾く先生の即興はとてもかっこよかったです。ピアノと友達なのかと思ってしまうくらい、どんどん素敵な音が奏でられていて聴き入ってしまいました。（東京 / ピアノ / ２年）

・たった３音のひとつのテーマからとてつもない長さの１曲をノンストップ即興で作曲していく様が本当に鮮やかだった。アルペジオを安定して弾いていく場面もあれば、途中ラヴェルやドビュッシーを思わせるようなオシャレな和音が出てきたりとても楽しかった。（東京 / 声楽 / ３年）

・困ったときはアルペッジョを下から上までじゃらんと弾いたり片手でメロディを弾いたりしつつ、もう片手では同じ和音を展開し続けたり、テンションコードを使用したりなど、先生から教わった方法がある、と知っておくだけでも即興しやすくなるだろうと思いました。（東京 / ピアノ / ３年）

・終始、渚先生の即興に圧倒されていました。好きな音を３つ選び、それを元に豊かな音楽が次々に派生してゆき、こうして音楽は作られていくのだなと思いました。ベートーヴェンを例に挙げてみても、確かに、一つの和音やアルペジオ、音階からできている曲が多く、納得したとともに、少しだけ即興演奏に対する抵抗が薄くなったような気がしました。渚先生の演奏を拝聴していると、次から次へと違う音楽が繰り広げられていて、自分の中で様々な引き出しを持っていることが必要なのかなと思いました。また、メロディーや音楽だけではなく、音質もとてもきれいで、即興をするにしてもピアノの基礎は必要なんだなと身に染みて実感しました。（東京 / ピアノ / ２年）

・最初、授業で即興演奏を実際に行うと聞いたときはとても不安でいっぱいだったのですが、実際に体験してみると大勢の皆さんとセッションすることができて、とても楽しかったです。まだまだ私は和音がすぐに思いつかず、単純な即興演奏しかできませんでしたが、他の先輩や参加者の方々はどんどんアレンジを加えていてとても尊敬しました。怖がらずに自分の表現の幅をもっと広げていけるように頑張ろうと改めて思いました。
（神戸 / ピアノ / １年）

・私は即興で演奏したこともなく何となく怖いイメージを持っていましたが、今回の講座を受けてとても楽しいものなのだと思いました。楽譜もなくお題の音で素敵な演奏になって驚きました。
（神戸 / ユーフォニアム / １年）

・即興って緊張するなと授業の初めは思っていましたが、こんなのも即興でいいんだとか、自然と和音になったり、やってみたらとても楽しかったです。Zoom 上でも参加できるのは新鮮でした。
（神戸 / 声楽 / ２年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 15 2021/05/13 9:54

令和2年度　第７回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第７回ミュージック・コミュニケーション講座 「オリジナルソングをつくろう～メロディーに自由にコードをつける～」
講　師	鈴木 潤（ピアニスト、作曲家）
実施日時	2020 年 11 月 27 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学中目黒キャンパス　C400（Zoom にて配信）
講座の概要	鈴木潤氏はレゲエの分野でピアニストとして活躍、その後編曲・作曲の分野にも活動範囲を広げられた。演奏活動と並行して保育園、小学校・特別支援学校・高齢者施設などで音楽ワークショップを行い、独特な「放置型即興」（音の砂場・音の運動会）で知られている。昨年は音楽ワークショップを導く上でヒントとなるコード、モード、リズムについて実践を交えて講義をしていただいた。今年も引き続き、クラシック専攻の音楽大学生が触れる機会が少ないコードの仕組みや歌作りについて、ワークショップの現場での経験談も交えながらお話しいただいた。 講座の冒頭では、鈴木氏がワークショップの導入（アイスブレイク）でよく用いるスイッチというゲームを行なった。このゲームはとてもシンプルで、リーダーが何等かの動作を見せ、「スイッチ」とリーダーが指示したら参加者がその動作を模倣するものである。リーダーの動作変化と指示出しの間に時差があるため、参加者に多少の混乱と個性的な動きが生まれることにより、初対面の緊張が徐々に解きほぐされ、場が温まる時間になった。学生にもリーダーをするチャンスがあり、数名がリーダー役を担った。Zoom 上での参加者もできるだけインタラクティブに巻き込むように配慮され、全体の一体感を感じることができた。 次にコードネームの話となり、コードをポジションの移動として捉える考え方が紹介された。例えば、C メジャーのコードを（ドミソ）１番、d マイナー（レファラ）を２番といった具合に、手の形と響きでコードを体感する。鍵盤上で手のポジションが変わっても、同じ手の形を保つことにより同じコードを掴むことができる。理論で考えるのではなく、体感的にコードを捉えるこの方法により、移調して演奏することも容易になる。特に、即興が多く求められるワークショップの現場では、さまざまな開始音に合わせてフレキシブルにハーモニーを付けるスキルは大変有用である。 最後に、黒板に学生が思いつく言葉を書き出し、それをその場で並び替えて歌詞に見立て、小グループに分かれてそれぞれ歌詞の一節に旋律を付けることで、オリジナルソングを創作した。学生たちはグループでの話し合いを楽しむ一方で、言葉を並べる段階ではもちろんのこと、その言葉にどのような音程を付けるのか、またそこにどのような旋律が繋がったらよいのかを考える段階で、どうにか意味あるもの、良いものを創り出したいと難しく考え込んでしまう場面も見られた。 どんなアイデアに対しても、あたたかく受け入れて音楽に仕上げていく姿勢、和音の引き出しの広さ、双方向な学びを創り出すリーダーとしての姿勢といった点で、鈴木氏のご指導は多様なインパクトを与えるものであった。今回の授業は、日常の言葉を基に鼻歌のように何気なく音楽を創り楽しむことの大切さ、音楽との向き合い方の多様性を振り返るよい機会となった。

2020_報告書本文_cc2019.indd　16　　2021/05/13　9:54

〈学生のことば〉

・みんなの選んだ言葉を繋いで簡単な曲ができあがって驚きました。更に曲も、規則性のない音列、というわけではなくまとまりのあるものになっていて、作っていて楽しかったです。また、即興演奏がどういう仕組みになっているのか少しだけでも解説してくださっていて大変興味深い授業でした。（東京 / ピアノ / ３年）

・歌詞に音をつけるということは、初めてでしたが自分のイメージが音になる感覚がとても楽しかったです。そして先生が即興で伴奏をつけてくださったのがとてもかっこよかったです。即興で先生のように弾けたら楽しそうだなと感じました。またグループで考えることで、私のイメージと違う意見が出たりそれぞれの個性が見えて面白かったです。曲の仕上がりにとても驚いたので、またやりたいです。（東京 / ピアノ / ３年）

・自分でメロディーを考えたり、想像することが今まであまりなかったので、とても新鮮な授業でした。先日教職の授業で作曲の課題があり、伴奏付けに大変手間取ったので、今日のお話はとても興味深かったです。（東京 / 声楽 / ２年）

・いつも心の中に音楽があるんだなと感じました。３度上を足していくことでどんどんオシャレなコードになり、こんなに気軽に和音が付けられるんだと目からウロコでした。先生が言うように、いつもお風呂でそれとなく思ったことに音程をつけて歌っていましたが、いざ作るとなると時間をかけていい物を作りたいという気持ちが出てしまい、すぐに歌詞に合うメロディが浮かばなかったのが少し心残りです。（東京 / ピアノ / ２年）

・今回の講座で和音には沢山の可能性があると感じることが出来ました。私たちが何となく作ったメロディーに先生がハーモニーをつけて下さり、１つの曲になったのを聴いた時はとても感動しました。１つの和音を少し変えるだけで全く違った印象を与えていました。先生のように沢山の和音を操って、音楽を楽しむことができるようになりたいなと思いました。（東京 / ピアノ / ２年）

・歌詞やメロディーを作ることにとても難しい印象を持っていましたが、複雑なことは考えずとも楽しい曲は作ることができるのだと知り、とても勉強になりました。また、自分一人でなく様々な方の考えた旋律を一緒に組み合わせることができたので、たくさんの発想を得ることができました。（神戸 / ピアノ / １年）

・今回の講座も即興に親しめて、前回学べたことも踏まえて考えられてよかったです。でてきた言葉から即応的な音楽ができるのも音楽の良さを感じました。ソルフェージュの授業で、コードネームも学んでおり、コードでの伴奏も丁度しているところで、色々なところから繋げて学びができたのも良かったです。（神戸 / 声楽 / ２年）

・即興でも歌になることに驚きました。歌詞も適当だし、メロディーも適当なのに意外といい歌になっていたのが驚きでした。（神戸 / ユーフォニアム / １年）

※写真は東京音楽大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 17 2021/05/13 9:54

令和2年度　第８回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第８回ミュージック・コミュニケーション講座 「クラシック音楽と社会との関係を考える」
講　師	大友 直人（指揮者）
実施日時	2020 年 12 月 4 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	神戸女学院大学　合奏室（Zoom にて配信）
講座の概要	第８回の講座は、日本を代表する指揮者の一人である大友直人氏を講師に迎えた。大友氏は桐朋学園在学中 22 才で NHK 交響楽団を指揮してデビュー以来、日本音楽界をリードし続けており、日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団専属指揮者、東京交響楽団常任指揮者、京都市交響楽団常任指揮者、群馬交響楽団音楽監督、琉球交響楽団音楽監督を歴任。2020 年 1 月より、高崎芸術劇場芸術監督を務めている。 今回は「クラシック音楽と社会との関係を考える」と題し、現代、とりわけコロナ禍における社会と音楽との関係、また次世代に求める音楽活動への取り組みについて話された。 まず大友氏は本学と東京音楽大学の受講生に、音楽を志したきっかけと、将来の目標について尋ねた。受講生の返答を受けて、「楽器を弾くのが好きになって、プロになりたいと思う」という純粋な気持ちや、音楽に対する憧れ、夢があるというのはとても大事なことだと語った。そして、自身が歳を重ねている実感とともに、身体も心も健康で元気に活動できる期間というのは思っているよりも短く、有効に使える時間は意外と限られていることから、若い人には、自分が何を目標としているのか、またしたいこと、すべきことを意識して学生生活を送ってほしいと言葉に力を込めた。音楽と自分というプライベートな関係だけでなく、人を通した音楽との関わりの大切さ、例えば重奏やオーケストラなど、他の楽器とのアンサンブルでしか実現できないことがあることも音楽の素晴らしさであり、それを聴いてくれる人がいるというのは何物にも代えがたい重要なポイントであると述べた。 また、いざ現場に入ることでオーケストラという組織がどのように成り立っているかということが少しずつ分かってきたとし、当たり前にあると思っている、音楽の世界が社会の中でどのような位置にあるのか、音楽を通して社会に対して何ができるのか、また社会からどのように思われているのか、需要と供給で成り立っている世界の中での音楽の立ち位置の難しさを感じながらも、あくまで音楽は人類にとって必要な宝物だと確信しているという。とはいえ、人々に音楽を提供するにあたり、時代とともに変わっていく部分があるのは否定できない。当然、その中で変わらない部分、また変えてはいけない部分もある。どれだけテクノロジーが発達したとしても、「ダイレクトな空気感や関わり」という部分は越えられない壁であり、それはまさに音楽を演奏する、また聴く上でも最も大事な部分である。 大友氏は昔から毎度のリハーサルや演奏の際に、心して多くの音を聴いたり、目線を配ったりと、自身の感覚を鼓舞しているといい、各々が常日頃から五感を意識し磨き続けること、そしてアンサンブルをする際には五感のすべてを意識し

2020_報告書本文_cc2019.indd　18　　2021/05/13　9:54

講座の概要	て音楽に向き合うことが肝要であると述べた。Zoom などの別のツールを通して音楽をするというのはやはり難しい部分があり、それは未来も変わらないのではないか。コロナ禍の中、ダイレクトに音楽を通して人とコミュニケーションをとることの大切さを痛感しているという。また、テクノロジーを通してコミュニケーションが取れる良さもあるものの、できることとできないことがある。人間同士が直感的に感じるオーラ・第六感のようなものが一番大事なのではと考えている。 音楽家である自分たちが社会で何ができるか、と考えても簡単には答えが見つからないが、一つ言えるのは、時間はあっという間に過ぎ去っていくということ、そしてこれからの時代を作るのは今の学生たちで、彼らが世の中の中心になる時代はもう目の前まできているとし、今の若いうちに、したいこと、やってみたいことは全身全霊をかけて励んでもらいたいと熱く訴えた。そうすることで見つけられるものが必ずあり、それがもしも社会と関わりを持つことに繋げられたなら幸せなことであると語った。 また、音楽というジャンルの衰退についても話された。西洋音楽のピークは越え、勢いとしては続いているものの、エネルギーとしては衰退期に入っているのではないかと考える。とはいえ、だからと言って音楽がなくなるということはない。なぜなら感動を人と共有したいのは万国共通だからである。ただし、劇場が主に楽しむ場所であった 20 世紀初頭とは状況が異なっており、現代は映画やラジオ、テレビ、ネットが主な娯楽である。社会におけるポジションが変わった現代で、「人間の生物としての必需品」としての音楽を社会の中でどうやって提供するか、というのが大きな課題となる。 人間は進化していると勘違いしがちだが、人間の五感は、大昔からずっと変わらないのではないか、と大友氏は語る。音楽というのは、その「変わらない」部分に最も密接したジャンルであり、これからの世代には、今までに生まれた音楽を継承するにとどまらず、今現在の魅力的な音楽を作り、演奏することで、多くの人々にその音楽への共感を持ってもらうことを実現させなければならない。それが成しえるほどに魅力のある音楽を奏でることができれば、社会に対して何らかのはたらきを具体的に作っていけると述べた。 大友氏の長年のモットーに「物事は簡単に出来ない」がある。自らの大変な努力なしには、人に感動を与えられるような心からの魅力ある演奏は生まれないと言う。理屈ではなく、出された音の裏側にどれだけのエネルギーがあるのかを聴く側は感じるのである。「音に込められたエネルギーを提供すること」こそが、演奏家にとって最も重要な使命である。氏はこの世の中において、現代の便利さとともに、膨大なエネルギーが失われていることへの危機感を持っているという。音楽を作る現場でも同様に、以前とは異なり、今は手間暇をかけなくても「それなりの」形になるという事態が起こっている。だが、それなりのものというのはそれなりの感動しか与えることができない。本当の感動というのは、時間をかけてコツコツ積み上げたものでしか作り上げられないのである。音楽が社会に対してできることは、決して変わることのできない、また変えてはいけない音楽と人間の関係、その関係性の素晴らしさを鮮やかに、魅力的に伝えていくことであり、それこそがこれからの未来を明るくできる方法なのではないかと語った。 映画も文学も漫画も、そして美術も現代の人たちが動かしている中で、クラシック音楽の世界はいびつな形になっている。昔から民謡のような流行の音楽はあるものの、現代では今活動している作曲家の知名度も低く、実際に演奏されている

2020_報告書本文_cc2019.indd 19 2021/05/13 9:54

講座の概要	のは主に昔のスタンダードな作曲家の作品である。若い世代には、それぞれの活動で活発な世界を作っていってほしいと述べ、「自分や、自分の仲間たちと、世の中に必要とされる音楽活動をプレゼンし、世の中に問うてほしい。特に若いうちは、時間は有限であるけれども失敗を恐れないでほしい。自分を信じて、手間暇をかけて、全身全霊で全エネルギーをかけて活動してほしい。それはもしかしたら何かにヒットすることができるかもしれない」と学生たちを激励した。 質疑応答では、作曲専攻の学生から「自分が作曲するうえで、自分が作りたい音楽を作りたいが、世界に対応していくということを考えたときに、人が好きになってくれるような作品を作った方がいいのか、自身が作曲する際に躊躇してしまう」と問われ、大友氏は、「自分が心から書きたいものを書けばいい」とし、こういうものを書かなきゃいけない、こうしなきゃいけないとは考える必要はないが、リクエストに応える技術と柔軟性を持っておくべきだ、と答えた。特に1900年代からの作曲の分野は難しく、人間の感性は変わらないものの、クラシックの世界はイレギュラーな世界になってきたという。基本的にクリエイターが使用している言葉、絵は共通して、時代に合わせて変化しているが、現代音楽の世界では、逸脱したクリエイティブなもの、つまり理解されにくいものが生まれてきた。だからこそ自身の感性を磨き、万人が共通に理解できる言葉を使った音楽を正面から作ってほしいと学生に伝えた。 現在の日本の音楽界における諸問題と今後の展望について、様々な側面から密度濃く語り、非常に充実した時間となった。次世代に対して大きな期待を寄せている大友氏の姿は印象的で、学生たちにも画面を通してその強い思いが伝わっていたように思う。

〈学生のことば〉

・初めて実際に対面で講義を聴くことができて嬉しかったです。私たちにとっては奏者になるということが第一の目標ですが、その先のことについて考えたことがなかったので、舞台で活躍されている先生のお話を受けて、これからのオーケストラについてという新たな着眼点を得ることができました。（神戸 / ピアノ / 1年）

・社会というものは音楽を必要としていることに驚きました。社会に対して自分が音楽を通して何ができるのかと考え行動することが大切なのだなと思いました。音楽は波長があり、今は衰退しているということにショックを受けました。今の時代、テレビやネットなどでつながることのできる世の中で、五感が全て実感することが少なくなってきているなと気付きました。当たり前のようにネットなどを使うようになっていますが、一番大切な空間というものを大切にしないといけないなと思いました。人に共感してもらうために、音楽をあまり知らない人のために、大きなエネルギーと努力が必要だと感じました。（神戸 / フルート / 2年）

・大友さんのお話はとても面白く、これから音楽をやっていく上で考えさせられる内容でした。私はピアノ専攻ですが、若いうちに技術をたくさん磨いておくことの重要性や、手間暇をかけた音楽にこそ感動があるというお話は、今後の練習の糧になり、もっと頑張ろうと思いました。また、時代とともに音楽の流れは変わるけれど、人間の感覚は変わらないという話も印象的で、私たちは社会に共感を持ってもらえるような音楽を作ることが大切なのだと思わされました。（神戸 / ピアノ / 1年）

・社会における音楽の役割を考え、需要と供給が一致するような企画や音楽活動をすることは重要だと分かりました。とても勉強になりました。（神戸 / ヴァイオリン / 2年）

・人の五感や感性は意識していれば研ぎ澄まされていくものではあるけれど、人それぞれ違っているということを活かして、自身の音楽ができたらと思いました。またそのうえで社会のニーズも考えたいです。（神戸 / 声楽 / 2年）

2020_報告書本文_cc2019.indd 20 2021/05/13 9:54

・「今の世の中は便利すぎる、人間が本当にできることをしないと、それなりのものしか出来ない」という言葉が印象的でした。
（東京 / ピアノ / 3 年）

・音楽の持つ力の大きさ、そして聴いてくれる人がいるのが当たり前でない、ということを感じさせられた講義でした。アンサンブルをしている時に、人間の五感を全て使って音楽を作り上げていることに気付かされました。感覚を使って音楽をしているということを強く意識して、練習に取り組んでみたいです。（東京 / ピアノ / 2 年）

・先生がおっしゃっていた「努力と時間をかけなければ良い演奏はできないし、感動してもらえない」というお言葉を聞いて、とても納得しました。天才的な演奏家やアスリートでも、見える・聴こえるその裏にどれほどの努力と練習が積み重なっているのかということ、人々の感動は、どれほどのこつこつとした日々の努力からうみだされているのかということなど心にくるものがたくさんある講義でした。（東京 / ピアノ / 2 年）

・もう一度、「なぜ音楽をやりたいのか」を考え、自分が進んでいきたい道を見つけられるようにしたい。そしてオンラインが主流になりつつある世の中ですが、対面でしか感じられない音楽や求められる音楽に応えていけるよう、音楽と向き合っていきたいです。（東京 / 声楽 / 3 年）

・これからも音楽業界は厳しい状況になると思いますが、人類にとって大切なものです。自信をもってたくさん勉強をしていきたいです。
（東京 / 声楽 / 3 年）

・時間と努力を惜しまずに取り組んで共感を持ってもらえる音楽を常に目指したいと思いました。
（東京 / ピアノ / 2 年）

・やってみたいこともやらなければいけないことも増えてきましたが、優先順位や選択する時に、自分が心からやりたいと思うことを選べる人でありたいと思いました。また他人に批判されるとしても自分の中から溢れた言葉や音楽や雰囲気までも大切にしたいと思います。自分のエネルギーを音楽の世界に向けていきたいです。
（東京 / ピアノ / 2 年）

・人間は社会との関わりなしでは生きていけないし、音楽も社会と密接にかかわっている芸術です。いかに自分が音楽大学で学んだことで社会貢献できるのか、残りの 2 年間でしっかり探っていきたいと思います。音楽で需要と供給を成り立たせることは容易ではないと思いますが、その時自分のいる時代の流れを的確にとらえて、その波に乗る努力をしていきたいと思います。
（東京 / ピアノ / 2 年）

・自分の将来のことをじっくり考えていきたいなと思いました。まだ 1 年生で、ではなく 1 年生だからこそ色々な音楽の仕事や自分のやりたいことが見つけやすいのではと感じました。
（東京 / ピアノ / 1 年）

※写真は神戸女学院大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 21 2021/05/13 9:54

令和2年度　第９回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第９回ミュージック・コミュニケーション講座 「参加者の心を動かすインタラクティブなプログラムデザインのコツ」
講　師	橋本 知久（時間芸術クリエイター）
実施日時	2021 年 1 月 8 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	Zoom にて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第９回のミュージック・コミュニケーション講座は、時間芸術クリエイターとして活躍している橋本知久氏を講師に迎えた。 橋本氏は多様な人たちの創造力（＝おもしろがる力）を引き出す、クリエイティブ・ラーニングを軸に活動している。作曲家、ファシリテーター、メンタルコーチなど複合的な専門性を生かし、全国の文化施設や教育機関等でワークショップや参加型プロジェクトを展開している。 はじめに、Zoom 上で受講生がそれぞれのカメラに向けてハンドサインで答えられる簡単な質問（スポーツは好きですか、等）がいくつかあり、次にチャットで答えられる質問（好きな音楽家は？魔法のランプがあったら？等）によるアイスブレイクが行われた。 橋本氏は、音楽はインタラクティブ＝双方向型であるべきだと言い、ライブなどでのお客さんの盛り上がりや反応によってパフォーマーもより、やりやすくなることを例に挙げた。続けて、教育についても、以前は知識を与える、あるいは教えることが主流であったが、現在は自分で導き出すための能力や力を引き出す教育が主流＝インタラクティブになってきていると述べた。 これらのことを音楽ワークショップにどのようにして取り入れているか、実際の活動や企画から紹介した。 ワークショップでは導入、展開、まとめの３つで構成しており、それぞれに大事にしていることを以下のように述べた。（一部抜粋） 導入部分 :1. グランドルール 自分を大切に、相手も大切に　等 ＝楽しむためのルール設定、一方的にならないための雰囲気作り 2. マインドセット 思いついたことは場にだそう 起きることすべてはラッキー　等、５つの心得 3. アイスブレイク 風船を渡しながらの自己紹介等、空気感を和らげる 人とコミュニケーションを取りやすくする 展開部分 : 心理的安全性の確保＝失敗できる場をあえて作る まずやってみて、失敗をしても、これはどうだったか？と考えてから、 もう一度挑戦できる流れは結果的に成功体験を生む まとめ　：発表で終わるか、対話で終わるか 発表で終わることは様々な場面でオーソドックスとされているが、

2020_報告書本文_cc2019.indd 22　　2021/05/13 9:54

講座の概要	さらにその発表からどう思ったのかを対話にする ここから広がっていくことを大切にする 受講生らはブレイクアウトルームにて４人グループに分かれ、これらの３つの部分の中で何が最も重要であるかを話し合った。 話し合いの中では、多くの学生が導入部分を最も重要視するべきであると答えた。冒頭で面白くないと内容に入るまでにやる気がなくなってしまう、ということであった。 この意見をきっかけに、ワークショップでのリーダーの人柄や人間的印象についての話題になり、橋本氏は、どういったキャラクター性を持っていくべきかをワークショップ毎に見極めていくことの難しさを述べ、講座は締めくくられた。

〈学生のことば〉

・コミュニケーションの取り方がほんとに人それぞれであり、方法も多様であることを感じました。参加型の講演やコンサートは客席・演者との分け隔てがなく、それぞれの経験や体験で学べることが変ってくるのが面白いと思いました。最初のマルバツは何かと思っていましたが、コミュニケーション、発言の入り口、ハードルを下げていくことだったのにも納得しました。心理的に考えたことがなかったので、スタイルを大切にしたワークショップが素敵だと思いました。役を演じ分けるのもそれぞれに寄り添えると思いました。
（神戸 / 声楽 / ２年）

・まず授業の導入部分がとてもスムーズで自分も取り入れていきたいなと思える内容でした。Zoom で画面とミュートを外すまでのコミュニケーションの取り方として、画面上で〇か×を手を使ってジェスチャーで伝えるというのは、必然的に画面もオンになりホストへの注目も集められてとても良いやり方だなと勉強になりました。橋本先生がおっしゃっていた導入や展開のやり方は、私たちも授業内で取り入れているものが多かったですが、改めてグランドルール、マインドセット、アイスブレイクという観点から見ると、「なぜそうするのか」が明確になり理解が深まりました。ありがとうございました。　（東京 / 声楽 / ３年）

・違いが価値になるという先生の言葉が、心にとても響きました。日本人はみんなと同じであることが美徳とされてきましたが、これからの時代は先生の言葉のように「ひとりひとりの個性が光り、その個性が認められる時代」になればいいなと思いました。　（東京 / ピアノ / ２年）

・今回の講座はワークショップの課題やコンサートを作る取り組みをしている私にとてもためになる、色々なことを考えさせられる有意義な時間でした。プログラム構成のどの部分が１番重要なのかと考えた時に、客観的に考えると私は絶対に導入だと思い発言しました。いかに興味を持たせ、引き込ませるか、最初の導入で後にうまく繋げられると思ったからです。しかし、作成する時のことを考えるとメインにばっかり重点が置かれているなと思いました。メインは１番伝えたい、教えたい事が盛り込まれているからそれが当たり前だと思いますが、そのためにはそれと同じくらい導入が重要であることに今回気づくことができました。今後作成するにあたって心がけたい点でした。先生が仰っていた“面白がる力”がとてもかっこいい言葉だなと感銘を受けました。制作側は常にその面白がる力を忘れずに、それがお客さんに伝えられるように様々な工夫を凝らしていいものを作っていきたいなと思いました。
（東京 / ピアノ / ２年）

※写真は Zoom 配信による講座の様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 23　2021/05/13 9:54

令和2年度　第 10 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 10 回ミュージック・コミュニケーション講座 「多様な視点が交差する～観察し、やってみて、対話する時間～」
講　師	橋本 知久（時間芸術クリエイター）
実施日時	2021 年 1 月 15 日（金）14：00 ～ 15：30
実施場所	Zoom にて配信（神戸女学院大学発信）
講座の概要	第 10 回のミュージック・コミュニケーション講座は、先週に引き続き橋本知久氏を講師に迎え、神戸女学院大学の履修生のみで行われた。 ワークショップスタイルで進めるにあたり、5 つのグランドルールを説明し、「起きることはすべてラッキー」だというマインドを掲げた。「多様な視点を持って、音楽でメッセージを届ける」をテーマに、答えのない問いについて皆で話し合い、考えを深めることを目的としている。 はじめに受講生全員の自己紹介と、橋本氏によるミニインタビューが行われ、好きな作曲家や自身の音楽家としての特徴等について尋ねた。その会話の中で、氏が以前から感じているという音楽作品との出会い方の変化について、現代の YouTube 等の台頭によって音楽との関わり方が希薄になっていることへの危機感を示した。 続けて、「Points of You」という写真カードを使用したコミュニケーションツールを使用して、「多様な視点」を実際に体験した。まずは、受講生が子どもの頃に好きだったもの、得意だったものを表すような写真を一つ選び、選んだ理由をそれぞれ説明してもらった。次に、受講生が自由に 2 つの音を決めて、それを基に橋本氏が即興演奏を行った後、その音楽の印象に合う写真を一つ選び、理由を述べてもらった。写真を選ぶという一つのアクションがあることで、話しやすくなるという効果があり、よりその人自身について知ることができるのがこのアクティビティの良さである。 「分断の時代を音楽で乗り越えるには」という今年度の MC 講座の年間テーマを考えるにあたり、パフォーミングアーツの持つメッセージ性が果たせる役割は大きいのではないかと橋本氏は語る。その中でも、「違う」ことをどのように楽しめるかというのは重要なポイントであるとし、音楽を楽しむ、またメッセージ（音楽）を届ける際の「違い」をどのような形で楽しむか、受講生同士で話し合った。 受講生からは、オペラなどでダブルキャストとして同じ役を演じる歌手の、それぞれの表現の仕方の違いを楽しむといった意見や、人によって同じ曲であっても演奏する際の解釈が異なることが面白いと感じるといった意見が上がった。また、楽譜は同じものであるのにもかかわらず正反対の解釈を伝えられて、そのような考え方もあるのかと思わされることがあるという気づきや、異なる考えを持つ人と演奏会等を企画すると、化学反応によって新しく面白いことが起こるといった実体験による感想を語り、「違い」を持つ人同士が与え合う刺激を受け入れ、前向きに捉えている様子がうかがえた。 異なる者同士が一緒の場所で響きあえるのか、ということをまさに体現しているのが音楽であり、違う楽器や違う声が響き合うからこそ生まれる豊かさがあると橋本氏は考えている。自分たちは何をハーモニーとして聴きたいのか？音楽は、

2020_報告書本文_cc2019.indd 24　2021/05/13 9:54

講座の概	世の中で起こる違和感や分断を越えていく方法を自分たちに教えてくれているのではないかと語った。 　また、音楽は「美しい」というのが重要な要素だと考えていたが、近年、幼児教育にも携わり、子どもたちと音楽を通した様々な活動を行う過程で、美しいという表現が当てはまらない場面にたびたび遭遇するという。それで浮かんだのが「面白がる」という言葉で、以来、「面白がる力で幸せをつくる」ことを自身のキャッチフレーズとしている。面白がることによって、対立したりぶつかり合ったりすることがなくなり、違うことも許せるようになっている感覚があり、それが今の自分にはしっくりくるという。 　最後に、MC 講座の年間テーマ「分断の時代を音楽で乗り越えるには」に対する提案として、橋本氏は「面白がって乗り越える」ことだとし、音楽や舞台芸術には対立を軽やかに乗り越える力があり、それらは私たちに大きなヒントを与えてくれているのではないかと述べ、２週にわたる講座を締めくくった。

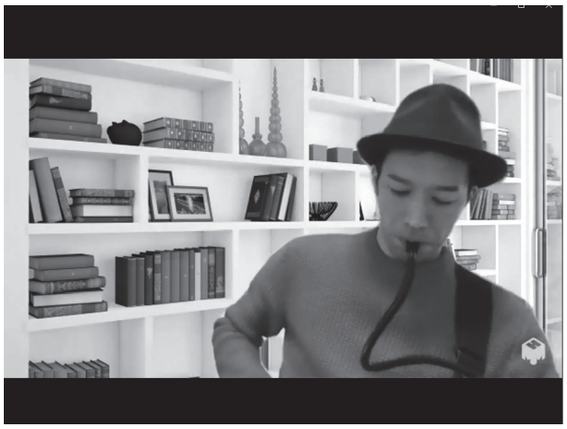
〈学生のことば〉

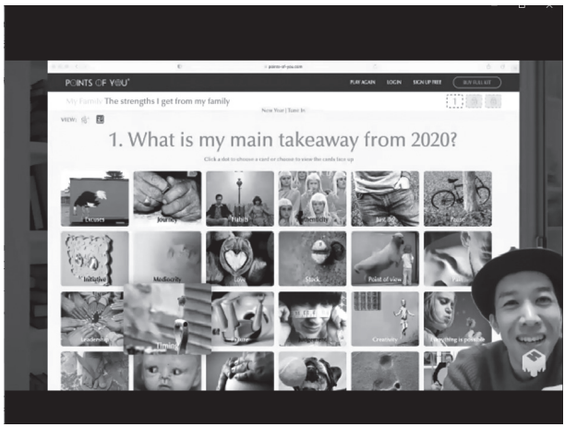
・ワークショップの進行や構成などをより詳しく学ぶことができてとても勉強になりました。イラストで思い出を共有し、音楽を聴いてイメージしたものを共有しあうということを初めてしたので、とても新鮮で楽しかったです。音楽の楽しさを専門的に学んでいない子供たちなどに伝えることは様々な工夫がいるのだと改めて実感しました。
（神戸 / ピアノ / 1 年）

・今日の講座内容をいかして普段からもっと積極的に授業に参加し、発言していきたいと思いました。
（神戸 / ユーフォニアム / 1 年）

・今回印象的であった、違いを楽しむということを活かした演奏ができたらと思いました。講師の先生が仰っていた幼児教育にも興味を持ちました。
（神戸 / 声楽 / 2 年）

・今回は東京音大と合同ではなく、ほぼ３人だけで、初めはかなり不安でしたが起きること全てがラッキーと思って、講師の先生と貴重な充実した学びができました。ワークショップはその場にいることに価値があると思いますが、Zoom 上だとそれぞれが自立して話していかないといけないのでその良さも感じました。分断の時代になったからこそ、本質が見えてきたこともあると思っていましたが、これがチャンスと楽しむという少し新鮮な見方もできるようになったと思います。違いが一定の場所で響きあうという魅力も今後、さらに経験として感じてみたいです。（神戸 / 声楽 / 2 年）





※写真は神戸女学院大学での様子です。

2020_報告書本文_cc2019.indd 25　2021/05/13 9:54

令和2年度　第 11 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 11 回ミュージック・コミュニケーション講座 ワークショップ企画案発表及び総括
講　師	東京音楽大学 学生（企画案発表）　津上智実・武石みどり（総括）
実施日時	2021 年 1 月 22 日（金）14：10 ～ 15：30
実施場所	東京音楽大学中目黒キャンパス C400（Zoom にて配信）
講座の概要	東京音楽大学の学生が、授業の課題として作成した小学生対象のワークショップの企画案を発表した。 1 組目は「動物に合わせた音楽を作ってみよう !」というテーマで、オリジナルの桃太郎の物語を音楽作品で作り上げるワークショップ。参加者は、もし自分が桃太郎だったら何の動物を家来にしたいかを考え、選んだ動物の音楽を創作する内容である。発表の後、動物の音を創作する際のアプローチ方法について Zoom を通してディスカッションを行い、鳴き声や「タヌキはポンポコ」といった既成概念に囚われずに、幅広い表現を受容していくことで、オリジナリティのある作品ができ上がるのではないかという意見が挙がった。 2 組目は「物語に音楽をつけてみよう」というテーマで、小学校の国語の教科書に取り上げられている「ごんぎつね」の物語に音楽をつける創作ワークショップを提案した。発表後のディスカッションでは、国語の教材を使用することは小学校の授業に音楽ワークショップを取り入れてもらう方法として効果的であり、国語と音楽の両方の理解につながる。したがって、このワークショップは総合的な学習として実践できる可能性もあるのではないかという感想が述べられた。 今年度は新型コロナウィルスの影響で実際に子どもたちを迎えてのワークショップを実践する機会を設けることが叶わなかった。そのため、例年各大学で行っている実践の報告ができなかったことは残念である。だがその一方で、オンライン上でのコミュニケーションの方法を学ぶ場面が多かった。来年度は社会の変化に合わせてさらにワークショップの多様な方法を模索し、実践まで繋げられる状況となることに期待したい。また受講学生には、大学における今後の学び、さらには卒業後の活動の中に、本講座で得た体験やヒントを活かしていってもらいたい。

〈学生のことば〉

・今回は自分が企画したワークショップを発表させていただき、様々な視点から企画を見直すことができ、とても貴重な時間となりました。主に秋学期の授業内で実体験したことを、自分たちの考えを交えながら企画したことで、一つ一つの活動にどのような意味があって、どのような効果を感じられるのかを理解できていたので、活動内容にしっかりとした根拠を持って発表できたかと思います。また、学内での発表で、私たちの説明で想像しきれない欠点部分も明確になっていたため、今回はそこを補足しながら発表ができました。特に神戸女学院の方々は、私たちが普段の授業で当たり前に行なっていることも知らなかったりすると思い、どれだけ明確に活動内容を伝えられるか不安でしたが、的確なご指摘や改善点を言って頂くことができ勉強になりました。自分たちでは想定仕切れなかったところや柔軟に対応できていない部分も見え、具体的に何を改善すれば良いかもわかり、とても意味のある発表でした。発表の機会をくださりありがとうございました。

（東京 / 声楽 / 3 年）

・今年 1 年間を通して MC 講座春・秋では体験参

2020_報告書本文_cc2019.indd　26　　2021/05/13　9:54

加型の授業だったので他の授業とは異なりアウトプットすることが多かったので学んだことがより身につきました。私は、普段人前で話すことが苦手なので最初は正直少し嫌だなと思いつつ授業を受けていましたが秋学期まで受け続けたことで少しは慣れたかなと思います。それでもまだ人前で話すときに相手に伝わるように話すことが苦手なので今後の課題とします。（東京 / ピアノ / 3 年）

・今回の講座では、私はワークショップの企画を発表させていただきました。自分がやりたいアイディアが詰まっていたので、伝えやすかったです。発表の課題としては、オンライン上で分かりやすいように手振りをつけてみたのですが、実際あまり映っていなかったので慣れが必要だと感じました。先生方から、小学生ならこんなこと起きるかもよ？という想定しておくべきことをご指示いただけたことで、より企画内容が良い方向に膨らみました。（東京 / ピアノ / 3 年）

・1 年間この授業を通して、身近なことから普段あまり深く考えることの無い事柄まで、本当に沢山の事を広く深く学ぶことができました。自分自身が演奏者として直接伝えることができる演奏時の心構え、裏方として支える役割、企画を制作する過程、本当に聞き逃せない程濃い内容ばかりでした。そして様々な先生方からのメッセージ性の強い言葉一つ一つが心に響きました。特に印象に残っているのは、何かに取り組んでいる際に壁にぶつかった時、なんで自分だけがと思わずにみんなこういう思いをしてきたのかと考えるといいというお話です。このような考え方を私は持っていなかったので、素敵だなと思いました。このお話を聞いて何となく楽な気持ちになれました。また、私たち表現者は音楽を使ってお客さんにエネルギーを提供しているということを改めて考えることができました。音楽を通じて、楽しみ、感動を人と共有する喜びが大切ということを実感できる授業でした。（東京 / ピアノ / 2 年）

・今回は遠隔授業が主で、神戸の方々がどのようなことをしているのかあまり知ることができなかったので残念だった。けれど東京音大の 2 組の発表を再度聞き、どうしたら伝わりやすいプレゼンができるのかという点がとても勉強になった。また、私は津上先生のコメントにもあった総合的な学習における音楽の勉強についてとても興味を持った。私自身総合的な学習という授業の一環で外部からプロの演奏家の方をお呼びして演奏会を聴いたりする機会があったが、よく考えてみるとそれはただの音楽ではないか、総合的とはいったいなんなのだろうと当時小学生ながら不思議に思っていたのをよく覚えている。最初、ごんぎつねのワークショップを聞いた時、他のチームの絵本からの創作と似ているから正直印象に残っていなかったのだけれど、思い切って他の授業と絡めるという方法を知り、そういう面白い授業をできる先生になりたいなとまで思った。

（東京 / ピアノ / 2 年）

・同じ学生の方が考えたとは思えないほど、見るとわくわくしてくるワークショップの企画を拝見させていただけてとても勉強になりました。同じ音楽を専攻して学んでいる学生を相手にすることと、まだ音楽に深く触れていない子供たちを相手とする時では全く方向性が異なるのだと改めて分かりました。子供の目線になって計画をすることはとても難しいと思うので、柔軟な考え方がいかに大切かということがよくわかりました。

（神戸 / ピアノ / 1 年）

・東京音大の方の企画書を聞いて、今までの講座で学んだコミュニケーション方法があらゆるところに生かされ、工夫されており、とても参考になりました。また、企画内容を発表することで、周りからも意見をもらい、さらに良い企画書になっていくのが興味深いと感じました。またワークショップは現場でいってみてわかることが多いと感じました。そのため、あらゆる場合を想定しておく必要があると思いました。多様性を大切にする学びも価値観や考え方がこれからより良くなっていく一因になりうると思いました。

（神戸 / 声楽 / 2 年）

2020_報告書本文_cc2019.indd 27 2021/05/13 9:54

おわりに

平成 21 年度に始動した共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、12 年目を無事に終えることができました。

令和 2 年度は、開始当初から新型コロナウィルスの脅威の下に大学の授業開始が遅れました。その後少しずつオンラインでの遠隔授業が開始され、東京音楽大学では秋学期より「実技を伴う科目」として対面授業に移行したものの、家族の都合や健康上の理由から登校できない学生もいるため、多くが Zoom の画面を通しての実施となりました。

まさに分断と孤立が進みかねない状況の下に、今年度の授業では「自分と向き合うこと」「オンラインで心をつなぐこと」が特に強調されたように思います。できないことを嘆くのではなく、何ができるのかを考え実践していくヒントと刺激を学生たちに提供できるよう、スタッフ一同、慣れない授業環境に苦戦しながら努めてまいりました。コロナ禍の終息はまだ明確には見えませんが、この事態をとおして「共にいること」「伝えること」の大切さを痛感させられたのは事実です。その思いを原動力に、現状そしてコロナ後に備えて、経験と思考を蓄積していければと思います。

末筆ながら、今年度もさまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

2021（令和 3）年 3 月

武石みどり（東京音楽大学・教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

令和 2 年度　活動報告書

令和 3 年 3 月発行

発行者　東京音楽大学　連携センター
〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5　B1005
Tel/Fax：03-3982-3227
Mail：music.communication.tcm@gmail.com

編　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
東京音楽大学　連携センター

表紙・本文デザイン　上條浩史

2020_報告書本文_cc2019.indd　28　　2021/05/13　9:54

2020_報告書本文_cc2019.indd 3 2021/05/13 9:54